親愛なるあなたへ…

久遠 哲二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親愛なるあなたへ…

【Ｎコード】
Ｎ３９２５Ｆ

【作者名】
久遠　哲二

【あらすじ】
それは夏の終わりのことでした…。

Chapter:0 ～Prologue～

２００８年某日、深夜。

「ふぅ…。」

と夜空に向けて溜息を吐く。

今日も悪友の光と遊び、また帰りは深夜になってしまった。

明日は休みだから、遅くまで遊んでもあまり問題はないのだが。

光とは、いつも待ち合わせに使っている駅で別れ、俺は今から一人で歩いて家に帰る。

駅前から商店街を抜け、裏路地に差し掛かろうとしたとき、

「こ、困ります…。」

と、声がした。

路地に入ると、数メートル先で３人があれこれやっている。

２人は男で、１人は女。

「いいじゃーん。これから俺たちと遊ぼうよ～？」

「そーそー。楽しいとこ連れてってあげるからさぁ。」

男2人が言った。

「でも、もう家に帰る時間なので…。」

2人に囲まれた女が言った。

「そんなことないよー。まだまだ夜はこれからじゃん！」

成程。

どーやらあの男AとB（仮）は、あの女の子をナンパしているらしい。

それにしても、人通りの少ないこの裏路地でナンパか。

まぁ、俺には関係ないか。

そう思ってその集団の前を通りすぎようとしたが、

「ん？あ、お前ちょっと待てよ！」

Aが言った。

俺のことか？

いや、違うよな、俺はあんな奴らと面識ないし。

「お前だよお前！」

だが、Ａは明らかに俺を指差している。

「何？」

指名されてはしょうがない、俺は立ち止ってＡたちのほうに向きなおった。

「あのさー、悪いんだけどお金貸してくんない？今からこの娘と遊ぶのにお金なくてさー。」

と言って肩を組んでくるＡ。言葉とは裏腹に、悪びれる様子など皆無。

香水の匂いがキツく、非常に不快だ。

つーか、いつ遊ぶの決定したんだ？

さっきの様子じゃ、その娘は嫌がっていたようだが。

改めてナンパされていた娘を見る。

年は俺と同じくらいで、結構可愛い。

まぁ、ナンパされるほどだもんな。

といっても、やはり俺には関係ない。

「金が欲しいなら働けば？俺、今帰るとこだから。んじゃ。」

俺がそう言ってＡの腕を振りほどき立ち去ろうとすると、Ａが俺の

ほうに寄ってきた。

「いいから金出せっつってんだよ！」

と言って、俺の背中を蹴った。

俺はそのまま地面とキスする破目になったのは言うまでもない。

「ったく、最初からおとなしく金出さねぇからだよ。」

と言って、Ａはハハハと笑っている。

「おいおい、いつもみてぇにやり過ぎんなよ～？」

といいつつＢも笑う。

俺は無言で立ち上がり、服の汚れをパッパッっと掃った。

そして、そのまま何事もなかったかのように立ち去ろうとする。

だが、今度はＡが俺の胸倉を掴んだ。

「てめぇ！金出せっってんのが判らねぇのか！？」

と言って、掴んだ手に力を込める。

「何だよ、折角人が穏便に済まそうとしてるのに。」

俺が言うと、

「ああ！？」

と言ってAは手の力をさらに強くした。

「…うぜぇな。」

俺はそのままノーガードのAの鼻に頭突きをお見舞いした。

「ぐぁっ！」

と悲鳴をあげて、Aは俺を掴んでいた手を話し、地面に倒れた。

「てっ、てめぇ！」

と言って、女の子を逃がさぬように引き止めていたBが俺のほうに走り寄って来る。

走る勢いそのままにパンチを繰り出したBだが、モーションが大きすぎてかわすのは他愛もなかった。

そのままBの鳩尾に一発お見舞いし、蹲ったところに蹴りを入れて、Bはノックアウト。

そして、鼻血を垂らしながら向かってくるAの胸倉と袖口を掴んで、投げ飛ばし、Aもノックアウト。

俺は乱れた服を直して、チラっと女の子を見る。

どうやら何が起こったのかイマイチ判っていないらしい。

だがすぐに我に帰り、俺の目の前に寄ってきて、

「あ、有難うございました。」

と深々と頭を下げた。

結構礼儀正しいらしい。

「別にアンタのためにやったわけじゃないよ。とりあえずもう夜も遅いし、さっさと帰った方が身のタメだよ。」

と言って俺はまた歩きだした。

「あ、あのっ！せめてお名前だけでも…。」

後ろから声がしたから、俺は立ち止った。

「沖田　翔。市立高校に通ってる高校生。んじゃ、俺は帰る。」

そう告げて、再び家に向かって歩きだした。

「おきた…しょうさん。」

Chapter:1 ～Hey my friend～

翌週。

「よう、調子はどうだ？」

朝、教室で座っていると、鞄を置くなり話しかけてきた奴がいる。

星野光（ホシノヒカル）。いつも俺と遊んでいる悪友だ。

「ん？翔、どーしたんだその頬。」

「頬？」

光に指摘され、触ってみると少し痛みが走る。

こんなとこ怪我した覚えは…あ、あの時か。

「気付いてなかったのか？」

「あぁ。今初めて気付いたよ。」

「何でまたそんなとこ切ったんだ？」

俺は光に先週末の夜の出来事を話した。

「へぇ、あの後そんなことがあったのか。ま、そんなナンパヤロー共なんて、軽くあしらったんだろ？」

「ま、敵じゃなかったな。」

「これも俺のおかげだな。」

といって光は笑った。

そうなのだ。俺と光は幼馴染。

光は幼い頃から色々な武道を習っている。

それで昔から光は俺をよく練習台にしていた。

初めは手も足もでない俺だったが、中学に上がる頃にはまともに相手が出来るほどになっていた。

だから、あんなナンパ野郎なんて屁でもない。

まぁ俺の戦い方は、光が色々な武道を習っている所為で完全に自己流だが。

「それで、その助けた女の子は？」

「別に助けたわけじゃねぇよ。」

「まぁまぁ。話くらいはしたんだろ？」

光が少しニヤっとして言った。

「いや、別に。」

「別にって、何も話さなかったのか？」

「早く帰れよ、とかは言った気がするけど。」

「それだけ？」

「そんくらいかな。」

「かぁー！これだから翔は！」

光が両手を広げ、オーバーリアクションをした。

「お前は顔だけみりゃ結構イケてるんだから、もっと積極的に行こうぜ！他校にもお前のファン結構多いんだぞ？」

「そうなの？」

初耳だ。

「あぁ。よく、『沖田君ってカッコイイ』って言ってるの聞くぞ。」

「全く判らなかった。」

俺は素でそう返した。

「ま、他校だからな。でも、そーゆーとこが可愛いんだよなお前は。」

光が他校と言ったのは、ウチが男子校だから。

当然、周りは男しかいない。

ちなみに、男に好かれる趣味はない。

そこでチャイムがなり、ＨＲのため担任が入ってきた。

今は３月で、明日から春休み。

高校１年のこの時期に担任が話すことと言えば、２年生は中だるみなんたらかんたら。

俺はそんな話には興味がないから、窓の外を眺めてボーっとしていた。

すると、担任が突然こんなことを言った。

「さて、明日から春休みで４月になれば女子が入ってくるからってあまり浮かれないようにな。」

「え？」

俺は唐突な話に、ついついマヌケな声を出してしまった。

「何だ沖田。まさか合併の話、知りませんでしたなんて言うんじゃないだろうな？」

いや、流石に俺でもそれはない。

生徒不足のため、近くにある女子校との合併についての話は入学前から知っていたが、今年からだっけ？

「今年からだ。春休み中によーく確認しておけよ。」

…どうやら声に出していたらしい。

ＨＲを終えるチャイムが鳴り、担任が出て行くと、光が寄ってきた。

「なんだ翔。来月から我が男子校に女子が来るの知らなかったのか？」

光がニヤついて言った。

「いや、もちろん合併は知ってたけど、来年度からだってのは知らなかった。」

「お前がちゃんと学校こねぇのが悪いんじゃねぇか。お前学校来ても大抵朝はいないしな。」

ぶっちゃければ、俺はサボり魔。

だが、テストの成績がそれなりにいいから何とかダブりは免れた。

ちなみにこの光は、テストの成績は平均やや下だが、ほとんど学校を休まないからダブりの心配はなかったようだ。

「新学期がこんなに楽しみなのは初めてだ！男ばっかだと自由だけど、華がないしな。」

という光の顔は希望に満ちている。

その後俺と光は終業式のために体育館に向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3925f/

親愛なるあなたへ…

2011年1月30日15時25分発行